真・恋姫†無双～未来からの介入者～

sengoku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双～未来からの介入者～

【Ｎコード】
Ｎ５９６８Ｙ

【作者名】
ｓｅｎｇｏｋｕ

【あらすじ】
真・恋姫†無双の世界にタイムスリップしてしまった一人の男。
彼の介入により新たな物語がはじまる。

第０１話　未来から来ました（前書き）

初投稿となります。なおこの作品はオリキャラができますのでそういうのが苦手な方は見ないことをおすすめします。なお私は褒めてのびるタイプの人間ですので辛口なコメントはひかえていただくとありがたいです。アドバイスなどはありましたらおねがいします。

第01話　未来から来ました

？「・・・・・今、助ける！」

その一言、その思いだけだった。

しかしだめだった。

彼は消えた。

唯一人の親友。そして俺は・・

死んだ・・・

？「はずだったんだけどな」そこには見たことのないような荒野が広がっていた。

？「日本じゃないよな・・」そうやって俺は一人たたずんでいた。

突然少女の声がきこえた。

？「おい、君！」

後ろを振り返るがだれもいない・・・・・・すると

？「下！下！」

そういわれて下を見てみると緑色の頭巾をかぶり、同じく緑色の古風な衣装を着た小さい女の子が立っていた。かくゆう俺は身長が１８０ぐらいあったりする。

？「そう君、君だよ」

？「・・・・・・・・・・」俺は黙る。

？「ああ、別に怪しいもんじゃないんだよ。そーだなあ。うん。自己紹介だ！」

？「・・・・・・・・・・」そういって女の子はつづけた。

姜維「わたしの名は姜維。字は伯約だ！よし。わたしは言ったから次は君の番だ」

？「！！！」

姜維といえばあれか。三国志にでてくる最終的には蜀にいたあの知謀と武に優れた武将じゃないか。俺はふと思った。まえにこんな本を読んだことがある。普通に平穏な日々を送っていた少年が過去にタイムスリップしたはなしだ。まさしく俺はそんな状況じゃないのか？

石神「俺の名は石神・・・・」

ここで字を一文字の「亮」を使うのは不自然だな。

石神「俺の名は石神・・雪村・・」

雪村というのは俺が救えなかった唯一人の人間であり唯一人の親友だった。この名かりるよ雪村・・。

石神「姜維。変な事を聞くが今のこの世をどう思う？」

姜維「黄巾党が暴挙とかし世は乱れに乱れ混沌とし新しい統治者を民は求めていると思うよ」

やはり今は三国志の時代らしい。しかしまだ三国はできておらず黄巾党がはびこっているようだ。なぜここに姜維がいて女の子なのかはおいておこう。まあいきていれば色々あるしな。

姜維「それで君は何をしているのかな？」

石神「俺は・・・・なにをすればいいんだろう？」

姜維「ならいっしょに旅をしないか？？この乱世おさめる旅だ」

ちょっとした昔話だがおれは警視庁の特殊部隊に所属していた。そのなかでもこの世の悪を正義にかえたいという一見理想のような夢を真面目にいだいていた。まあそんな夢をもっていたのはおれぐらいだったがな。

石神「いいよ。行く当てもないし。どの時代であろうと悪は見逃せない」

姜維「時代？まあいいや。うん。これからよろしくね！わたしの真

名を預けるよ。燦(さん)っていうんだ」

石神「真名？ってなんだ？」

姜維「ははは君おもしろいね。真名っていうのは自分の本当の名で心を許した人にしか呼ばせちゃいけない名なんだ」

この時代にはそんなものがあったのか。なら・・・

石神「俺の真名は亮だ。これからよろしくな燦」

燦「うん。よろしく！亮！」

亮「ああ」

第０１話　未来から来ました（後書き）

思ったとおりむずかしいですね。

まあがんばって更新していきたいと思います。

第０２話　決心しました（前書き）

２話です。

第０２話　決心しました

亮「なあ、燦」

燦「なんだ亮？」

亮「いつまでこの広い荒野を俺たちは見続けるんだ？」

燦「まあ、もうちょっとだよきっと。そんなことときにしてたら乱世なんておさめられないよ。さあがんばろー。えいえいおー」

はああ・・・・・

能天気だなこいつは。

もう半日は歩いてるぞこれ。

そう思いながらも俺は黙々と歩いていた。すると・・

燦「ほら。村がみえてきた」

そこにはにわかに信じがたい光景があった。

亮「おい！なんか煙があがってないか？」

燦「うん。焼き鳥でもつくってるのかな？」

亮「なわけあるか！いくぞ！」

燦「ちょっとおお。そんなに焼き鳥たべたいのおおお・・・？」

そんな声もきこえたがそれどころじゃあない。あれは絶対に火によって燃えている。あの量だとおそらく賊の仕業だろう。

亮「くそっ・・・」

そんな思いを持ちながら俺は村へ急いだ。

亮「だめだったか・・」

家は燃え、人が倒れ、村は全く機能していなかった。

燦「焼き鳥じゃなかったの・・・」

そんなことを言っている燦に俺は生存者を探すように言った。

燦「わかった」

そんな威勢のいい返事をした燦を最後まで見ることなく俺も生存者を探した。

半刻ほど探しまわし燦と合流すると3人くらいの少年と一緒にいる燦を見つけた。

亮「燦！その子たちは・・」

燦「うん。燃えていない家のなかで震えていたのをさっきみつけたんだ。」

たしかによく見ると震えている。なかには泣いている子さえいた。俺にはどうしていいかわからなかった。かける言葉さえ思いつかない。ここまで絶望している人を今まで見たことが無かった。

亮「・・・・・・・・・・・・・・・」

亮「君たち・・・賊が憎い？・・・・」

少年たち「・・・・・・・・・・・・うん」

亮「そうか・・」

俺の中で積み上げてきたものが崩れ落ちた。この世の悪を正義に変える。そんなものは夢物語だった。
今までの俺がどれだけ平和におぼれていたのかがわかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

亮「燦。俺は悪をなして悪を討つ。そして平和な世を築く」

そんな思いが俺の中をめぐっていた。誰かが犠牲にならないと平和はなりたたない。

燦「・・・・・・・・・・・・・・・」

燦「私は亮の仲間だよ・・」

燦はそう言ってくれた。その言葉は生涯俺の中に刻まれ、きえることはなかった。

亮「君たち。もしかしたら村の人を助ける事ができるかもしれない。協力してくれないか？」

少年たち「するよ！もしかしたらお母さんも助けれるかもしれない。」

悲しみをいだきながらも少年たちはそう言ってくれた。

亮「じゃあ賊の根城を知ってるかな？」

少年たち「うん。知ってるよ。西に1里いったところにあるよ」

亮「よし。じゃあすぐいくぞ」

そう言って俺たちはすぐに出立した。

燦「なるほどこういう地形なんだ・・」

そこは背の高い植物が生い茂っておりその真ん中につかわれなくなった屋敷がたたずんでいた。あそこに賊はいるらしい。

亮「火だな・・・・・。あとは・・」

燦「人だね！」

亮「さすがだな燦。俺もそれを考えていた。」

少年たちは頭に？マークを浮かべていたが燦にはわかっているようだ。

亮「君たちはこれをつくってくれ」

少年たち「これってなんですか？」

亮「それは・・・・・・・・・・・・・・・するためのものだ」

少年たち「！！なるほど」

少年たちはびっくりしたようにお互いの顔をみながら感心していた。
そして俺は言った。

亮「奇襲は今夜かける。燦は村に戻り使えそうな武器と旗かなにかをもってきてくれ」

燦「わかった」

亮「俺はできるかぎり見つからないよう近づいて賊の情報を集める。絶対に見つからないようにな」

そして各自の動きにうつっていった。

俺は少ししたら一人になった。あの少年たちは強いな。ふと思った。本当はつらいはずなのにきじょうに振舞っている。俺も決心しないとな・・・・。人を傷つけること。人をころすこと。

そして誰も悲しみを抱かない世をこの手でつくること。

亮「さて俺も動かないとな」

そしておれは情報を得るべく賊の屋敷に近づいていった・・

第０２話　決心しました（後書き）

いやああ。むずかしいですね。

オリ主のキャラが変わってしまったように思えます。

まあそこんところはこれからがんばります。

第０３話　助けました（前書き）

さあ３話にはいってきました。

今回は戦闘描写を書きますがうまくかけているか不安です・・

第０３話　助けました

亮「なるほど。あそこに捕らえられているのか。おそらく賊は５０人くらいだろうか」

予想はしていたが１００人にも満たないか・・。屋敷自体そんなに広くはなかった。しかもぜんぜん整備していないせいか屋敷のギリギリまで植物は生い茂っている。

亮「これならまずまちがいなく村人を助けられるな・・・・。そろそろ戻るか」

そうつぶやいて俺はみんなと待ち合わせている場所までもどった。

燦「おっかえりい」

亮「ああ。頼んだものはあったか？」

燦「うん。剣もあったし旗も白くて大きいのがあったよ」

そこには2本の剣とかなり大きい旗があった。

亮「パーフェクトだな」

燦「パーフェクト？」

・・・・・・そうか。この時代横文字は通じないな。以後気をつけるとしよう。

少年たち「あのお・・。お話中悪いですがこちらもできました」

亮「ああ。ありがとう。これで準備は整ったな。じゃあいくぞ！」

少年たち・燦「おおおおおお」

亮「燦、初戦だな」

俺は隣ですでに戦闘準備にはいっている燦に話かけた。

ちなみに燦が「わたしもたたかう！」と言い出したので燦にも武装させている。

燦「うん。わたしも腕がなるよ。」

そういいながら威張っているが燦はけっこう体格もきゃしゃでとても剣をふれるようには思えない。

亮「まあ。信じるしかないか」

燦「なんか言った？」

なんでもないといわんばかりに首を横に振ると俺は叫んだ。

亮「全軍！突撃いいいいいいいいい」

燦・少年たち「おおおおおおおおおおおおおおおおおお」

俺たちはめいいっぱい叫んだ。そして少年たちは一斉に立ち上がった。少年たちは背中に長い木に松明を２０～３０本縛り付けたものを背負っている。これが３人いるので８０～９０の松明があることになる。

賊「おい！お前ら夜襲だ！おきろ！」

そういって武装した賊が出てくる。

賊「なんだありゃ！かなりの数いるぞ！」

そう。これこそが亮、燦のねらいだった。背の高い植物が生い茂っているなかではひとの姿はほとんど見えない。そんななか松明だけが何十本もみえるかたちになる。そうなれば混乱は必須だ。

その効果はてきめんだった。

賊「あんな数かなわねええよ！にげろおおおお」

賊「待て！にげるな！戦え！」

賊の首領らしき人物が叫ぶ。

そして俺はその混乱の中につっこんだ。
そして周りの敵を次々となぎ倒していく。

賊「なんだこいつ！めちゃくちゃつえええぞ！」

そう言うのは無理ないだろうな。俺は思った。俺はかつて警視庁特殊部隊に所属しておりそのなかでも一応隊長をまかされていた。訓練も生半可なものではなく自衛隊の比ではなかった。そのなかで剣術もしており俺は部隊のなかでも本当に圧倒的な差をつけ剣術を得意としていた。さらに型のない剣術を主としていたため実践もあまり苦にしなかった。

しかし・・・

俺の進んだあとには鮮血が舞っていた。それがとてつもなく気になった。

亮「だめだ！俺は決心したんだ！・・・・・・・・燦！そろそろ屋敷に捕らえられている村人を解放してこい！解放したらあの旗のところに誘導するんだ！」

燦「わかった！亮・・・・・死ぬなよ・・・」

亮「死なねえよ！はやくいけ！」

そういいながら俺は賊を切り殺していった。

２０人はころしたな・・・・・・。

俺は罪悪感に浸っていた。

賊の半分くらいは戦う前に逃げてしまっていたようだ。

しばらくして決着はついた・・・・

少年たち「おかあさあああああん！」

そう言って少年は喜びに溢れていた。いいもんだな、やっぱりこっちのほうが幸せだ。

少年たち「雪村さん！ありがとうございました！」

亮「いいよ・・・・。おかあさんとこにいきな」

少年たち「うん！」

燦「亮うううううううう」

後ろから叫び声が聞こえてきた。

そして横に避けた。

ゴンッ！燦が地面に突き刺さる。

・・・・・

燦「いってえええなあああ」

亮「しらねええよ。お前が突っ込んでくるからだろ！」

燦「わたしは亮との再会を純粋に喜んでいたんだよ。それをなんだね君は？ええ？」

亮「ははは」

戦いが終わった後ぐらいはたのしくやろう。悲しみと罪悪感は胸にしまいこんで・・・。

燦「かえろっか？」

亮「そうだな」

そうして俺たちは帰路についた。
このあと４００人近い村人に歓迎されつかれはてることを今の俺たちはまだ知らない・・・・

第０３話　助けました（後書き）

３話かきおえました。

戦闘描写どうだったでしょうか？

やはり自分ではちょっとわかりませんね。

まあこれから上達するようがんばりますね。

第０４話　馬超に会いました（前書き）

４話です。

やっと恋姫のキャラが出てきます。

第０４話　馬超に会いました

俺たちは村を後にしていた。

その理由としては馬騰が義勇兵を募っているという情報を入手したからである。

しかし俺たちは来る前とは状況が変わっていた。

俺たちの後ろには１００人ほどの兵士が続いているのだ。

亮「なんか・・・すごいな・・・」

そう俺がつぶやくと・・

燦「何言ってんだよ！わたしたちが国をもつようになったらこの何十倍。否！何百倍、何千倍の兵力を扱うようになるんだよ！」

そう、燦は叫んだ。

正直こいつの先をみるちからは尊敬に値する。

亮「そうだな」

しかしこの大所帯になったわけは１ヶ月まえに遡ることになる・・・

・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

俺たちは宴会の最中だった。

長老「さあさあ。雪村殿。伯約殿どんどんのんでくだされ」

燦「では！遠慮無く！ぐびっ。かあああああ。うめえええええ！」

少しは遠慮しろよな。心ではそう思いつつ燦を見ていた。
すると燦がいきなり語り始めた。

燦「わたしたちは・・えっぐ（泣）この乱世をおさめるためにたち
あがったのにい・・・えぐっ（泣）
そのための力が全然なくてええ・・・ぐすっ（泣）」

こいつかなり酔ってるな。それにしてもどんだけ涙脆くなんだよ・・
・

しかし・・・ここまで泣くとは・・・こいつの新たな一面を発見したな。
それにしてもなんだろうな。このみょうに同情を誘う涙は・・
すると一人の青年がたちあがり・・・
村の青年「うおおおおおお（泣）俺がその夢手伝うぜえええええ」
村の鍛冶屋「俺もだあああああああ（泣）」
村の男「おおおおおおおおおお（泣）」
・・・・・・なんだこれ。
長老「ふぉっふぉっふぉ。ここまで村の若者が心動かされるとはの。雪村殿どうかこのものたちをあなた方の大望のために役立ててはくださいませんかの？」
そう言った長老もちゃっかり泣いていた。そして俺は驚きながらもとりあえず返事をしておいた。
亮「えっ。ああ。ええ。そうですね」
燦「者共！わたしに死ぬまでついてこおおおおおい（泣）！」
村の男たち「うおおおおおおおおおおおお（泣）」
どっかの怪しい宗教団体みたいだな。こりゃ・・・
そうして一ヶ月間俺がかつてこなしていた訓練をくみこみながら兵

たちを育てていった。その甲斐あってかかなり屈強な兵士に育って
くれた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

亮「まあ。あればかりは酒癖の悪さに感謝しないとな・・」

燦「ん？なんか言った？」

亮「いや。なんでもない・・」

そうして俺たちは馬騰がいる天水へとむかって進軍していた・・・・
・・・

亮「着いたな」

そうつぶやいて周りをみわたすとけっこう町はにぎわっていた。

俺たちは早速馬騰の許しを得て入城し馬騰とこれからについて話した。

馬騰の話によると黄巾党は首領の張三姉妹を曹操が討ち取ったためすでに終息にむかっているらしい。となると次は反董卓連合へと話はうつった。馬騰は少しでも兵力がほしく、各地で義勇兵を募っていたらしい。

するといきなり馬騰がこんなことを言ってきた。

馬騰「もしかするとその身なりからして君がわたしの領土に落ちたという天の御使いかね？」

亮「はい？？？」

意味がわからなかった。俺はちまたではそういう風に言われているのか。

亮「いや。俺はべつにそん「そーなんですよ」

俺が言葉を言いおわるまえに燦が話に割り込んできた。

燦「この方こそわたしが旅で流浪しているころにひとすじの光とともに落ちてきた正真正銘の天の御使いにございます。馬騰さま」

馬騰「おう！やはりそうか」

俺は燦に耳打ちした。

亮「おいっ。そんな適当なこと言っていいのか？ばれたら色々と面倒だろ」

燦「まあこっちのほうが色々と都合がいいし、いいじゃん。案外全部うそってわけでもどうせないんでしょ？」

そういえば燦は俺の過去について一切を知らない。いや、聞いてこない。こういうところ器がでかいんだな。

俺はまた耳打ちでかえす。

亮「まあな。確かに怪しい格好もしているしな」

そう。俺は今まで前の世界で着ることの多かった黒い武装服を着ている。これは周りの人からすればかなり怪しいだろう。

馬騰「話をつづけていいかね？」

亮「ああ。はい、すいません」

燦「すいません！すっかり存在を忘れておりました」

この馬鹿！一言多いんだよ！

しかし馬騰は怒った様子も無くこう続けた・・・

馬騰「天の御使いに頼みがあるのだ・・・」

亮「なんでしょうか？」

馬騰「実はわたしは北方の異民族を討伐せんといかんため反董卓連合には参加せんのだ。それで娘の馬超とその従妹の馬岱をいかせるのだが・・・。色々と心配でな。御使いどのに同行してほしいのだ」

燦「かしこまりました！」

いやいや今の俺に聞いていただろ。

馬騰「そうか。いってくれるか！ならばすぐにでも翠たちの屋敷へ行き、挨拶を済まして連合へとむかってくれ」

そううれしそうに答えた馬騰に

亮「かしこまりました」

そう答えた俺たちは馬超の屋敷へとむかった・・・

馬超の屋敷へついた俺たちは部屋へととおされた。

馬超　・・・・・なんだこいつのこの殺気は・・・・・

亮たちのいる部屋へ向かい、扉を開ける瞬間にそう感じた。
馬超は思った。それは決してにじみでているものではない。が、いくつもの戦いをつんだ彼女ならわかる。こいつはかなりの武の持ち主であることを・・

馬超「失礼する」

亮「どーも・・・・」

これが馬超か・・・・。やはり女なんだな。前々から気づいてはいたがこの世界では三国志の主な人物は女になっているらしい。

馬超「失礼だが、あたしと手合わせしていただきたい」

亮「はい？？？」

やれやれ親子そろって困らせるな。

亮「いいですよ」

つい俺はそう言ってしまった。正直相手は一騎当千の猛者であるのできがひけたが歴史に名を残す人物と戦ってみたいという気持ちのほうが強かった。

そして俺たちは外へとでた。

外はけっこう広く手合わせするには十分すぎる広さだ。

馬超は模造の槍、俺は模造の剣をもっている。

馬超　・・・・・こいつ、隙がない。こんなゾクゾクする勝負は久しぶりだな・・・・・

馬超「いくぞ！」

そういった瞬間、無数の突きがとんできた。

亮「くっ」

さすがは五虎大将にも選ばれた武将なだけはある。生半可な攻撃ではなかった。

しかし・・・・

亮「まだまだ隙は多いな」

そういって大きく突いてきた槍をかわし懐にもぐりこんだ俺は馬超

の首のところで剣をとめた。

亮「俺の勝ちだな」

そういうと馬超はその場に座り込んだ。

馬超　・・・・・わたしが負けた。はじめて。男の人に・・・・・・

そういって上を向いて俺を見た馬超は顔を赤くしていた。俺にはよくわからなかったがとりあえず手を差し伸べた。

亮「大丈夫か？」

馬超「うん・・・」

それを横で見ていた燦は

燦・・・・・あちゃー。ありゃ。惚れたね。完全に・・・・・・

そうしてその場をあとにしたおれたちは準備をし、３日後には馬超とともに連合の駐屯地へと出立した。

第０４話　馬超に会いました（後書き）

書き終わって気づいたのですが蒲公英がでていませんね。

まあ次でなんとか都合つけて登場させます。

第０５話　反董卓連合に参加しました（前書き）

やっとこさ5話ですね。

テストが終わったばかりなので張り切って書いていきます。

第０５話　反董卓連合に参加しました

連合の駐屯地へと到着した俺たちは案内を受け自分たちの天幕にいた。

亮「翠。本当に当面の俺たちの軍の主導者は俺でいいんだな？」

翠「ああ。亮に任せるよ」

この駐屯地に来たとき軍の所属を言うのだが翠はその所属を俺だと言った。それが俺はきになっていた。なんでそう言ったのかはわからなかったが、まあ俺を認めてくれたのだろう。そう思うことにした。

ちなみに俺たちが真名を交換したのはここにくるまでの行軍中のことだ。ついでに燦も交換している。

亮「それにしても馬岱はまだ来ないのか？」

翠「さあ。蒲公英（たんぽぽ）は、いきなり現れるからな」

そう。この蒲公英こと馬岱はまだ俺たちとまだ合流していない。出立するときいきなり「ちょっと用事思い出した！」と、言い放ちどっかにきえてしまったのである。

亮「そうだ！翠、連合に参加している諸将の特徴を可能なかぎり教えてくれないか？」

翠「ああ、わかった。えーとだな・・・・・・・・・・・・・・

そんなこんなで半刻ほどがたとうとしていたとき・・・

使者「石神さま、至急連合による軍議を行うためこちらに来てください」

やっとか・・・・

亮「わかりました」

そういって俺はこの乱世に生きている英雄に会えることに期待しつつ天幕をあとにした。

そうして指定された天幕にむかい、席についたとん軍議は始まった。

袁紹「やれやれ。あなたが最後ですわよ。全くこれだから男はだめなんですわ」

亮「ああ、すまなかった」

そう一言侘びを入れた俺を見ることなく袁紹は話を続けた。

袁紹「そんなことはどうでもいいですのよ。それでは名族のわたしが進行役をつとめる軍議を始めますわ」

すごい上から目線だな。しかも自己中だし・・。これが袁紹か。なんというか・・・なあ・・・

公孫讃「はいはい、わかったから麗羽、とっとと議題を言ってくれないか？」

こいつが公孫讃か。見たかぎりでは常識人っぽいなあ。

袁紹「そんなことあなたに言われなくてもわかっていますわ！でもその前にもっと大切なことがございませんこと？？」

公孫讃「？」

すると一人の少女が話に入り込んできた。

曹操「どうせ、麗羽のことだからこの連合軍の盟主を決めようとか言うんでしょ」

曹操か・・・・これが・・・・さすがだな。まだこんなに若いのに覇王の気に満ち満ちている。

そんなことを考えていると燦が耳打ちをしてきた。

燦「あの人はいつかわたしたちの壁となりますから気をつけた方がいいと思いますよ」

またか・・・。こいつには先を読む力に加えて人を見る力もあるな・

・・・。

亮「ああ、そうだな」

俺はそうつぶやいた。

袁紹「そこ！なにくっちゃべっていますの！」

亮「すまない」

さすがに少しだまっておこう。

話はけっこう長引いたが盟主は袁紹ということで終わった。やっと終わったので天幕に戻ろうとしたのだが・・

袁紹「ちょっとお待ちなさいな」

後ろから袁紹がいきなり話しかけてきた。

亮「なんでしょうか？」

袁紹「あなたがたに名誉である先陣を務めさせてあげたいと思っているのですが引き受けてくださるかしら？」

亮・燦・翠「！！！！！」

翠「そんなの無理に決まってるだろ！あたしたちの軍は２０００し

かいないんだぞ！」

そう翠が言うのも無理は無かった。相手の兵数、将がわかっていない状況で２０００という数字はあまりにも危険な数字だった。しかしここでさがるわけにはいかない。

これはチャンスだ。

亮「その役目、お引き受けいたします」

翠「亮！」

燦「翠。これはまたとない好機だよ！」

翠「・・・・わかった」

なにか言いたげではあったが翠は黙って了承してくれた。

袁紹「そうときまったら、すぐに出陣しなさいな」

すぐにでも殴りかかってやりたかったがそこはなんとかこらえた。

出陣の準備を終え、いわれたとおり先陣として進んだ俺たちは最初の関所。泗水関の前に布陣していた。泗水関は両側を崖に挟まれた天然の要塞だ。

亮「袁紹からなにか通達はあったか？」

燦「あったけど・・・べつに伝えなくてもいいと思うよ」

亮「・・・・・・・・・読んでくれ」

なにやら怖かったが俺は燦にそう言った。

燦「じゃあ・・読むよ・・・・・。先陣は華麗に往々しく進軍とのことです」

亮「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

翠「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

燦「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

亮「まあ策はあるからきにしないでくれ」

燦・翠「うん・・」

まあさっきの軍議のときからおもっていたが袁紹はどうやら馬鹿らしい。

しかしここまでとはおれも予想していなかった。

まあ切り替えていきますか。

亮「まず翠は泗水関の門前まで行って敵将を挑発してきてくれ。開門したのを見たらすぐに引き返すんだぞ。そして、戻って来たらそのまま５００の兵で左翼の指揮を任せる」

翠「わかった」

そして泗水関に馬で駆けていく翠を見送り、今度は燦に指示をだした。

亮「燦も５００の兵で右翼の指揮をしてくれ」

燦「了解だよ」

そうして待っていると馬で帰ってくる翠と泗水関が開門する様子が見えた。

燦「ほら。亮！こういうときに味方を鼓舞する言葉あるでしょ！それ言ってよ」

そうだな。士気にも関係してくるしやっとくか。

俺は一度大きく深呼吸をし、叫んだ。

亮「西涼の勇者たちよ！董卓に苦しめられている民のため、今こそ立ち上がり我が旗に続いて奮闘せよ！」

その言葉に燦も続いた。

燦「我らは天の御使いによって導かれる天兵なり！恐れるな、我らには天の加護がある！」

亮「全軍抜刀！突撃いい」

石神軍兵士「おおおおおお」

その声とともに敵軍との差は縮まっていった。
すると敵軍からも将らしき人物の声が聞こえてきた。

華雄「我が名は華雄！このわたしに挑もうとするものはいるか！」

華雄か・・これは損害がふえるかもしれないな・・・・そんなことを思っていたとき・・

？「ここにいるぞー」

崖の上から威勢のいい声が聞こえてきた。

翠「蒲公英！？」

そう言った崖の上にいた部隊は崖を駆け下り華雄の軍に横撃をかけた。
それは並大抵のことではなかった。だが馬岱はそれをやってのけた。
その攻撃を華雄軍は予想もしておらず、華雄軍はたちまち大混乱となった。

亮「俺の策はまるつぶれだがしょうがない。伝令！」

伝令「はっ！」

亮「右翼の燦と左翼の翠に包囲網を敷くよう伝達してくれ」

伝令「はっ！」

そう言って伝令はかけていった。

亮「よし！俺たちはこのままこの中に雪崩れこむぞ！後ろには袁紹の本陣がある！気にせず突っ切れ！」

そういうと俺たちは華雄の軍へと押し入った。

華雄「くそっ！落ち着け！四方に散るな、前に突撃をかけよ！」

そんな声も聞こえない状態に華雄軍はあった。

そんな華雄を俺は見つけた。

亮「華雄！俺は石神雪村！いざ、勝負」

そういって華雄にむけてつっぱしった。

華雄「石神など聞いたこと無いわ」

そう言い放ちながら華雄が振り下ろした斧のような武器をかわし、華雄の首めがけて剣を振りぬいた。

亮「くっ」

華雄の血が俺のまわりに飛び散る・・・

亮「華雄の首！この天の御使い、石神雪村が討ち取ったりいいい」

石神軍兵士「おおおおおおおおおおお」

ときの声があがった。大将をなくした華雄の軍は脆く５００ほどは投降しあとはほとんど討ち取られた。
そして泗水関へと入城した俺たちは袁紹にあった。

袁紹「むむう・・お手柄でしたわね・・」

悔しそうにそういう袁紹を見ながら

亮「はい、ありがとうございます。ですが今回の戦いで兵を損じてしまったため次の虎牢関攻めは後曲にまわしてもらえるとありがたいのですが・・」

まあ、実際はかなり損害は小さいがな。

袁紹「もちろんいいですわよ！」

よっぽど俺たちに手柄をたててほしくないのか袁紹はうれしそうにそう言った。

そして俺は翠と燦、そして馬岱のところへいった。
すると馬岱が翠に説教をくらっていた。

翠「なんでそうおまえはいつもいなくなるんだ！」

馬岱「ちゃんと現れたじゃん」

翠「まあ、そう怒るな翠」

俺はなだめるようにそう言った。
そして翠は怒りながらも我慢してくれた。

亮「でも馬岱。ああいう無茶はもうやめろよ」

馬岱「うん。ありがとお兄ちゃん。でもその馬岱ってのやめて。蒲公英でいいよ」

亮「そうか、じゃあこれからもがんばろうな蒲公英」

そう言う蒲公英の頭をくしゃくしゃと撫でていると・・

燦「亮うう、いちゃいちゃしてるとこごめんけど亮もかなり無茶してたよお」

翠「そうだ！亮、お前もかなり無茶してたぞ！」

亮「えっ」

そうして俺はみっちり二人に説教された・・・

第０５話　反董卓連合に参加しました（後書き）

「ここにいるぞー」

これ、前々からずっとかきたかったんですよね。

念願叶いました。

第０６話　捕らえました（前書き）

６話ですね。

第０６話　捕らえました

俺たちは今、虎牢関に向けて進軍している。なお俺たちは後曲に配備されひと時退屈な時間を過ごしていた。

翠「なあ、亮。あたしたちは今回出番がないんじゃないか」

亮「いや、俺たちは戦闘が始まった場合すぐに参戦するぞ」

そう俺は翠に返答した。

翠「でもそれじゃあせっかく後曲にまわしてもらったのに損害が出てしまうじゃないか」

まあその通りではあるがな。

燦「違うよ翠。虎牢関攻めはおそらす激しい戦いになるんだ。だからそれに参戦することは世の中の風評を手に入れることになるんだよ。でしょ！亮」

亮「ああ」

確かに燦の言ったことも理由の一つである。しかし俺はそれ以上に曹操や孫策の戦いぶりを見てみたいという好奇心にかられていた。

～曹操陣営～

曹操「秋蘭」

夏候淵「はっ」

曹操「一つ頼みごとがあるのだけれどいいかしら？」

夏候淵「なんでございましょうか、華琳さま」

曹操「石神軍をあなたの部隊で常に監視できるようにしておいてほしいの」

夏候淵「？・・・・・確かに石神は先の戦で武勲をたててはおりましたが華琳さまが目をつけるほどの者でしょうか」

夏候淵はそう答えた。

曹操「ええ。あの者はいつかわたしの覇道に華を咲かせる存在になるわ」

夏候淵「かしこまりました」

そういって夏候淵は自らの部隊へと戻って行った。

曹操　・・・・・まさかこの連合で3人もの英雄たる「気」をまとっているものに巡り会えるとわね・・・・・

そう思いながら曹操は静かに笑っていた。

～石神陣営～

蒲公英「とうちゃ～く」

俺たち連合軍は虎牢関の前まできてすでに布陣していた。先陣を袁紹、その右が袁術、そして左が劉備、袁紹の後ろに曹操、孫策、俺たちなどが配備された。

～虎牢関～

？「恋、ここはひとまず篭城やで」

恋「・・・・・・・・・・篭城・・・・・だめ・・霞・・・・戦う」

？「そーですぞ。霞殿、ここは決戦しかありませんぞ」

頭に学生帽のようなものをかぶった少女はサラシをまいた女に言った。

霞「せやな、ねねと恋の言うとおりや。じゃあ連合のやつらにきっつい一撃くらわしたあとゆうゆうと洛陽ににげるか」

ねね「はい！それが最善ですぞ」

恋「・・・・・・・敵・・・・・・・来る・・・」

霞「ほなさっさと行くで」

～石神陣営～

亮「やはりでてきたか・・・」

俺はおもむろにそう言った。

翠「なんで敵は篭城しないんだ？」

翠のその疑問に燦が答えた。

燦「この兵力差で篭城しても洛陽から援軍がくるわけじゃないし、それならいっそのこと決戦にもちこんでひとあてしてから逃げてしまおうっていう作戦だと思うよ」

まあ燦の言うとおりだろうな。このままでは相手さんも全滅がおちだ。だから篭城をやめて出てきたんだろう。

そうこう言っているうちに袁紹軍が突撃をかけた。それに続き袁術、劉備も突撃をかける。

亮「よし！俺たちは袁術の方の加勢にいくぞ！」

全軍にそう通達し俺たちは袁術の方へ向かった。

想像どおりでこわいんだが、やはり袁術もそうとうの馬鹿でありむやみやたらに突撃を繰り返しているありさまだった。

すると前からものすごい突撃力をもつ騎馬隊とともに一人の武将が声を張り上げてきた。

張遼「我が名は張遼！うちと勝負するもんはおれへんのか！」

そして俺は考えていた策を実行に移した。

亮「よし！全軍！左右に散れ！」

燦「亮！それはだめだよ、そんなことしたら全軍がちりぢりになっちゃう！」

この時代は集団戦法が主な戦い方だった。だからこの時代の燦から言わしてみればそれは自殺行為であった。

亮「大丈夫だ！敵がすぐに来る」

そう言うと張遼の部隊がすぐさきに見えた。

燦「ほんとだ！来た」

そう言うと前から５００ほどの騎馬隊が突っ込んできた。数自体はそんなに多くはなかったが、進軍スピードがはんぱなものではなかった。

そしてその騎馬隊はそのまま俺たちの軍の中央までつっきってきた。

張遼「あかん！」

張遼が気づいたときにはすでに遅かった。

亮「全軍！ときの声をあげろ！今こそ勝ちどきだ！突撃いいいい」

石神軍兵士「おおおおおおおおおおおおおおおおお」

兵を分散さしているぶん張遼を３６０度包囲することが出来た。文字通りの包囲だ。しかも四方から突撃してくる俺たちの軍とときの声に驚いた張遼の騎馬は次々と暴れだし落馬するものさえ出てきた。

張遼「くそっ！あかん、はめられた！全軍、退くんや！撤退、撤退いいいい」

しかしこの状況で騎馬を反転させ逃げにこうじるのは愚策だった。

翠　・・・・・すごいな、亮は。こんな状況をつくるなんて・・・・・

そのとき翠は張遼を見つけた。

すると張遼めがけて馬をはしらせ槍の一撃を浴びせた。

張遼「くっ」

張遼はその一撃を自らのエンゲツトウで防いだ。

翠「あたしは西涼の馬騰が娘！錦馬超！張遼とお見受けした！いざ」

そう言い、翠は張遼に槍を振るった。

張遼「うちは張遼や」

張遼もそう言い返し翠と一騎打ちを始めた。二人は３０合打ち合ったが勝敗は決しなかった。

翠「はあ、はあ」

張遼「はあ」

二人は息があがっていた。それを見ていた燦は張遼めがけて矢を放った。

その矢は張遼の乗っていた騎馬へと命中した。

張遼「くっ」

張遼は流れるままに落馬した。それを見逃さない翠は張遼の首に槍を突きつけた。

張遼「あかん。うちの負けや」

そういった張遼を翠は捕らえ、張遼の部隊も半分ほどは投降した。

その光景をひとりの武将が見ていた・・

夏候淵　・・・・・あれが石神雪村、一つの策であそこまで張遼の隊を混乱させるとは・・・・・

そのとき夏候淵は亮に恐怖を感じた・・・・・

第０６話　捕らえました（後書き）

ここ３週間連続でテストがあるんですよね。

かなりきついです・・・

第０７話　勧誘しました（前書き）

７話です。

今回はあの人が仲間になります。

第07話　勧誘しました

俺たちが張遼隊をやぶったのをかわきりに呂布、陳宮は劉備に捕らえられ、虎牢関は孫策が陥落させたらしい。虎牢関に入城した連合軍は一度大休止をとってから洛陽にむけて進軍することになった。
そして俺たちはようやく虎牢関に落ち着いた。

亮「で・・・・翠・・・・そいつはどうしたんだ？」

そこには縄で縛られ、翠に見張られている張遼の姿があった。

翠「あたしがこいつとの一騎打ちで勝ったんでな。一応捕らえておいたんだ」

翠は誇らしげにそうこたえた。

燦「よく言うよ。わたしの弓の腕のおかげでしょ」

すると翠は困った顔をして黙り込んでしまった。
そんな翠を横にいた蒲公英はくすくす笑いながら見ていた。

張遼「そうやで。うちは負けとらん！」

そんな場の空気をなだめるように俺は言った。

亮「まあ、勝敗はおいといて・・・・・・・張遼。君は今どういう立場にあるかわかる？」

さっきの表情とはうってかわり今度は真面目な顔になって張遼は言った。

張遼「・・・・・・・・うちも武人や。ここで果てる覚悟はできてるで」

張遼は少し黙ったあとはっきりそう言った。
確かに張遼にしてみればこの状況では自分が処刑されるのだと思ってもしかたない。

しかし・・・・・・

俺の考えは違った。

亮「違うんだ・・・君に俺の仲間になってほしいんだ」

張遼・翠「！！！！」

張遼と翠は驚いていたが燦と蒲公英はおどろいていなかった。

・・・・・・・・

張遼「・・・・・・・仲間？・・・・・・・」

張遼は疑問めいた口調でそう言った。
それに対し俺はこうこたえた。

亮「ああ。でも俺たちはべつに馬騰殿に仕えているわけじゃないんだ。あくまで客将として今この軍をひきいている立場なんだ。だから俺たちには財力も無ければ兵力も地位もない。そんな俺たちにあるのはこの乱世を終わらせ平穏な世を築きたいという気持ちだけなんだ。それでもいいというなら俺たちのところに来てほしい」

少し考えたあと顔を上げ張遼は言った。

張遼「・・・・・・・・・わかった。うちはあんたが気に入った。うちもあんたと一緒に築いた平穏な世とやらをみてみたい。これからはあんたに仕えたるわ」

そう言った張遼に対し翠は張遼にこんな疑問を投げかけた。

翠「おい！張遼、お前は本当にそれでいいのか？お前は今の主、董卓を裏切ろうとしているんだぞ」

張遼「・・・・・・うちはそういうかたっくるしいのが苦手やからなああ。そういうのようわからんわ」

亮「そうか。なら・・・」

すると張遼がいきなりこう言い出した。

張遼「・・・・・一つ条件があるんや」

張遼は悲しそうな顔でそう言った。

亮「なんだ？・・・・」

張遼「月・・・・・いや董卓はなにもわるいことなんかやっとらんのや。ほんまは全部、十常侍のせいなんや。せやからな石神・・・・・董卓を助けてやってほしいんや」

翠・蒲公英・亮・燦「！！！！」

俺たちは絶句した。それが公になれば連合軍は目的を失ってしまう・・・・・

亮「そうか・・・」

これは公表したらいけないな・・・

穏便にことを進めないと・・・

亮「わかった・・その条件、のもう」

張遼「ほんまか？」

張遼は嬉しそうにそうこたえた。

亮「しかし俺にも条件がある。俺は張遼、君に仕えてほしいんじゃ

なく仲間として協力してほしぃんだ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・

張遼「はーはっはっは。主従関係はぃらんてか！あんた、ほんまにおもろぃなあ。よっしゃ、そういうことやったらうちの真名あずけとくわ。霞っちゅうんや」

張遼は笑いながらそう言った。

亮「わかってくれたか。なら俺もあらためて自己紹介をしておこう。石神雪村。真名は亮だ」

俺がそう言うとほかの３人も続いた。

燦「わたしは姜維。真名は燦だよ」

翠「あたしは馬超。真名は翠だ」

蒲公英「蒲公英は蒲公英だよー」

そういい終わると俺たちの顔を見ながら霞は言った。

霞「亮に燦、翠、蒲公英か。これからよろしゅうな」

俺たちは霞にむかって頷いた。

…………………

霞「なあ。亮」

亮「どうした霞」

霞「そろそろ縄ほどいてくうへんか？」

第０７話　勧誘しました（後書き）

今回は戦闘なしでいきました。

読みにくい場面があったらいってください。

第０８話　一刀に会いました（前書き）

さあ８話です。

今回は洛陽でのお話です。

第０８話　一刀に会いました

霞を仲間に引き入れた俺たちを含む連合軍は今、洛陽へと進軍していた。

亮「霞、お前が俺たちの陣営にいることは絶対にもらすなよ」

これは連合として動いている間の当面の措置として俺はそう霞に言った。

霞「うちかてそれぐらいのことわかってるて」

霞も当然だと言わんばかりにそう言ってきた。

蒲公英「お兄ちゃん、今けっこう進軍速度が速いけど伏兵とかきにしなくていいの？」

蒲公英がそう言うのはあたりまえだった。今は全く警戒もなんもせずただひたすら洛陽へと進軍していた。この進軍速度ではもし伏兵にあったとき対応できない。

しかし伏兵はありえないと俺は考えていた。

亮「いや。董卓に戦う意志が無いのは霞に聞いてわかったからな。おそらく伏兵はいないだろう」

蒲公英「ふーん」

俺の思ったとおり道中は何事も無く洛陽につくことができた。

そして俺はみんなを集めこう言った。

亮「俺は今から洛陽に潜入する。それにいたってこれから言う者は俺についてきてくれ」

翠「なんでそんなことするんだよ亮」

翠のそんな疑問に対しては俺ではなく燦がこたえた。

燦「洛陽に連合が攻め入ってからじゃ董卓が討ち取られるかもしれない。だから連合が押し入る前に自分たちで潜入して董卓を助けてしまおうって考えているんだよ亮は。でしょ！」

俺は驚きながらこたえた。

亮「ああ、そうだ。わかったか翠？」

翠「うん。わかったよ」

納得したように翠は頷いた。

亮「じゃあ言うぞ。霞と燦。この両名は俺とともに行動してくれ。翠と蒲公英はこの軍をまかせる」

そう言い終わった俺は霞、燦とともに洛陽の城内へと向かった。

城内に入ってみると今から戦いが始まろうとしているとは思えない状況が俺の目の前にはあった。人は笑い、街はにぎわっていたのだ。

亮「これは暴政をしているやつの街じゃないな」

べつに霞の話を疑っていたわけではなかったがそんな街を目の前にして俺はそんな声をもらした。おっと、こんな感慨にひたっている場合ではない。

亮「霞。董卓の特徴を教えてくれ」

霞「董卓は・・・そうやなあ・・・水色の髪で・・・ちっちゃくて・・・。そうや！その隣にはめがねをかけた緑色の髪をした女が絶対おるはずや。ちなみにその子は買駆っちゅうんや」

亮「わかった。燦、霞。今からてわけして探すぞ」

俺は静かに二人にそう言った。

俺はしばらく探すとその二人らしき人物を見つけた。そして警戒されないよう近づいていった。

すると思いもよらないことが起きた。

？「もしや貴殿は董卓か？」

亮「！」

驚いた俺はおもわず物影に隠れてしまった。

そう言って董卓らしき人物に話かけた黒髪の女は自分のとなりにいる女に言った。

黒髪の女「星、ご主人様はまだ来ないのか？」

星「さあ。あのお方は足が遅いからな」

どうやらあの二人は軍の人間らしい。まずい！そう思った俺は黒髪の女と董卓らしき女の子の間にわって入った。

亮「待ってくれ！董卓は何もわるいことなどしていない！」

「！！！！！」

その場にいた４人は驚いていた。そして俺から距離をとった。

黒髪の女「貴様！何者だ！」

黒髪の女は警戒して武器を構え、そう言った。
しかし俺もすぐに言い返した。
亮「俺は石神雪村、連合軍の馬騰の代理で来た者だ」
黒髪の女「何？じゃああなたはあの華雄をわずか1合で討ち取り、あの神速と名高い張遼の部隊を壊滅させたあの石神か？」
一度冷静になった俺はゆっくりした口調で言った。
亮「そうだ。だからこの人たちを見逃してはもらえないだろうか？」
すると顔を赤くした黒髪の女は頭を下げた。
黒髪の女「我が連合の方とはしらず失礼なことをした！」

そしてしばらく彼女たちと話していると黒髪の女があの関羽。星と呼ばれていた女があの趙雲であること。彼女たちも董卓が暴政などをしていないのを知っていること。そして董卓たちを助けようとしていることなどを知った。
俺は心配なんてしなくてよかったんだな・・・
むしろ董卓たちも何ももっていない俺たちより軍事力をもっていて

人材もそろっている関羽たちにかくまってもらったほうが安全だろう。

亮「それじゃあすまないけど関羽、この件は君にまかせるよ」

関羽「ああ、あなたもきにせずにな」

そしてそれまで黙っていた董卓も口を開いた。

董卓「みなさん・・・ありがとうございます・・・・」

安心した俺は関羽たちに別れを告げ連合に戻ろうとした。

？「おーい星、愛紗あ」

そんな声が聞こえ俺は不意に振り返った。

亮「！！！！！」

そして俺は目の前にあった光景を信じられなかった。そこには真っ白な制服のようなものをきた青年がいた。あの生地はあきらかにこの時代のものではなかった。

すぐに俺は青年にかけよった。

亮「君は・・・・・いったい・・・・」

青年は驚きながらもこたえた・・・

一刀「俺は北郷一刀・・・・あなたは・・・・・・？」

亮「俺は石神雪村・・・・・日本から来た」

一刀「！！！」

周りの者にとっては聞きなれない国であったが俺と北郷にはわかった。

それから少しではあった俺たちはこの状況にいたった理由、これからについて語り合った。

一刀「それじゃあ石神さんはこの乱世で生きることにきめたんですね・・・」

亮「亮でいいよ。一刀くん俺はこの世界に愛着をもちすぎてしまった・・・。それに俺は一回死んでいるしね」

そういい終わると連合が洛陽に入城してきた。

亮「一刀くん俺はそろそろ行くよ。董卓たちを頼むよ。で・・・・今度あったときは君の答えを聞かせてくれ・・・」

一刀「亮さん・・・またどっかで会いましょう。まだ色々と話もありますし・・」

俺は小さく頷きその場をあとにした。

俺がいなくなったあと関羽は一刀にきいた。

関羽「ご主人様・・・・あの方は?・・・・・・」

一刀「同郷の人さ・・・・・・」

第０８話　一刀に会いました（後書き）

一刀登場です。

登場頻度はそんなに今のところ多くする予定はありません。

第０９話　勧誘されました（前書き）

９話です。

第０９話　勧誘されました

一刀とわかれた俺は翠と蒲公英のいる軍へと戻った。そして董卓のことについて話してやった。

しばらくして燦と霞も戻ってきた。

霞「あかん。見つからへんかった・・・・・・」

そう落ち込んでいる霞に俺は今までのことを全部話した。

・・

霞「！ほんまか・・・・・・場所はちごうても月が無事ならうちはそれでええわ」

俺はそんな霞の安心した顔を見て微笑んだ。

しばらくして連合は解散となった。

連合も連合で街中で董卓は死んだという噂が流れているのを鵜呑みにして事実確認もせずに解散ということになった。まあこれはおそらく関羽たちが流した噂だろうからいいんだけどな。それに盟主があの袁紹だから仕方ない。

そして俺が率いていた馬騰軍も解散となったわけだが・・・・

翠「いいだろ別に！わたしたちんとこにおいよ」

なぜ翠がこんなことを言い出したかというとそれは俺たちがこのまま涼州に帰らないと言ったからだ。俺もさすがに馬騰に甘えてばかりではいけないと思ってそう言ったのだがなぜか翠はそう言ってきた。

亮「翠。俺はだな・・・」

翠「・・・・・・・・・・・」

今にも泣きそうな顔で翠は沈黙を保った。

燦「まあ亮、行く当てもないしもう少し馬騰さんとこでお世話になってもいいんじゃない？それにね亮。女にはいろいろとあるんだよ」

亮「そうなのか？・・・・」

燦「そうなんだよ」

亮「そうか・・・・・」

深くは考えないでおこう。

そして涼州に帰ることが決まった俺たちであったがおもわぬ客が俺をたずねてきた。

？「石神雪村はいるかしら？」

金髪の女の子はそう言いながら入ってきた。その後ろにはそれぞれ赤と青のチャイナドレスを着た二人の女がいた。

亮「曹操か。なんのようだ？」

前にも軍議で何度か見たことがあった俺には彼女が何者かわかった。その後ろの奴らははじめましてなのだが。

？「貴様！華琳さまにむかってなんだその態度は！！」

曹操「春蘭、やめなさい。・・・・この二人は夏候惇と夏候淵よ」

夏候淵「夏候淵だ」

夏候淵は静かな口調でそう言った。

夏候惇「夏候惇だ！」

それに対し夏候惇は、はっきりした口調で言った。

そして俺は話をもとに戻した。

亮「それで。曹操、なんの用だ？」

曹操「そうね。単刀直入に言うわ。石神雪村、あなたわたしに仕えないかしら？」

俺が答えるまえに翠が話に割り込んできた。

翠「そんなのだめに決まってるだろ！！！」

曹操「あなたには聞いてないわ」

翠はなにも反論してこなくった。さすがに翠も覇王の毒気にあてられたんだろう。

曹操「それであなたの答えは？」

俺はすぐにこう言った。

亮「論外だな、俺は誰の下につく気も誰の上に立つ気もない」

曹操は少し考えたあと俺に疑問をぶつけてきた。

曹操「どういうことかしら？」

亮「言葉どおりの意味さ。まあ今回の連合は都合上俺が軍の指揮をしたんだがな」

曹操「そう・・・でもわたしはあなたをあきらめないわよ」

曹操はわかれも告げずに俺たちの天幕から出ようとした。そんな曹操に俺は一言だけ言った。

亮「曹操！」

曹操はこちらに振り返った。

亮「はやく魏を建国できるといいな」

曹操「！！」

まわりのものなんのことだかわからなかった。夏候姉妹でさえわかっていなかった。

去り際に俺にも聞こえないような声で微笑みながら曹操は言った。

曹操「ますます気に入ったわ」

そして俺たちの前から姿を消した。

霞「失礼なやっちゃなあ」

翠「霞の言うとおりだぜ」

蒲公英「蒲公英はあんまりああいう人、嫌いじゃないけどなー」

3人は思い思いのことを口にしていたが燦だけは違った。

燦「亮・・・・・魏ってなに？」

燦の珍しく真剣な顔とはうらはらに俺は誤魔化すように言った。

亮「燦、いつに無く真剣な顔だな。まあその疑問はいつかわかるさ」

俺が誤魔化そうとしているのを悟ると燦はいつもどおりの顔に戻っていた。

燦「ええー亮の意地悪ー」

亮「いつか教えてやるよ」

いつかな・・・・・・・・・・・・・・

俺たちが馬騰のもとに帰ると城内はとてもあわただしかった。
そこらへんにいた兵士を捕まえた霞は兵士にこの状況について問いただした。

霞「おい！どうしたっちゅうんや？！」

馬騰軍兵士「はっ！それが・・・馬騰さまが・・・・」

翠「父上がどうしたんだ？！」

それまで黙っていた翠は馬騰という単語が出た瞬間血相を変えてそう言った。

馬騰軍兵士「馬騰さまが異民族の討伐よりお帰りになってしばらくたちましてから馬騰さまが病にかかってしまい、医師に見せたので

すが先が短いと・・・」

翠「亮！すまないがまっていてくれ！」

蒲公英「蒲公英も！」

翠と蒲公英は馬騰が寝ているという部屋へと走っていった。

燦「馬騰さん無事だといいけどなあ」

霞「うちも馬騰にはおうたことないけど人が死ぬのはいややけんな」

亮「霞、まだ死ぬとはきまってないだろ」

霞「すまん・・・」

そう言った俺ではあったがなぜか妙に落ち着きがなかった。

第０９話　勧誘されました（後書き）

少し投稿が遅れました。

これからは週２～３のペースで投稿していきたいと思います。

第１０話　決心してくれました（前書き）

１０話です。

さあいきましょう。

第１０話　決心してくれました

待っていても翠と蒲公英が来ないため俺たちも馬騰が寝ているという部屋へむかった。

その途中で翠と蒲公英が歩いてくるのが見えた。

亮「翠・・・どうだった？・・・・」

翠は首を横に振るだけだった。

亮「蒲公英・・・・・・・・・・」

このときばかりは蒲公英も重苦しい表情で答えた。

蒲公英「おじさん、死んだよ・・・・・・」

燦・霞「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まただ・・・・俺にはかける言葉がでない。

翠「・・・・あたし父上の葬儀の準備があるから・・・・・・・・」

そう言って蒲公英を連れどこかへ行ってしまった。

亮「・・・・・燦・・・・・・・・。俺って全然成長してないな・・・・・・・」

燦「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

燦はなにも言わなかった。

馬騰の葬儀が終わるまで数日かかった。その間俺は翠に会わなかった。

葬儀が終わった次の日、俺は翠とばったり出会った。

亮「翠・・・・・・・・・」

翠「おお亮！久しぶりだな！最近見なかったから心配してたぞ！」

・・・・それはあきらかに俺に心配をかけまいとする翠のやさしさだった。それがひしひしと伝わった。

亮「翠・・・・・・・・」

翠「亮、ちょっといいか？」

そう言って翠は俺を連れ馬術訓練所へとやってきた。

翠「ここ、父上との一番の思い出の場所なんだ。ここでいつも馬術の訓練をしたもんだよ」

淡々とした声で翠はそう言った。

翠は今も悲しみに浸っていた。俺にはそれがわかった。だがそんな翠を癒す方法が俺にはわからなかった。

亮「翠・・・」

俺は衝動的に翠を抱きしめた。

亮「ごめんな。ごめんな翠・・・」

俺は心からの叫びを口にした。

翠は顔をくしゃくしゃにして言った。

翠「なんでだよ亮。なんでそんなことするんだよ・・・・うれしいはずなのに、うれしいはずなのに涙が止まらないんだよ」

翠は泣いていた。今まで溜めていた涙をいっきに溢れさせるように・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

翠「・・・・・・・もういいよ」

かぼそい声で翠は俺に言った。そして俺を少し遠ざけた。

翠「亮、ありがとう。これで全部悲しみが消えるわけじゃないけどあたしはこの馬鹿が残した国をまもらなきゃいけない。泣いている場合じゃないんだ。行こう亮！これから忙しくなるぞ」

いつもの翠だ。やっと自分の中でこたえをみつけれたらしい。

よかった・・・・・・

亮「俺に手伝えることがあればなんでもするよ」

そうして俺と翠は玉座へと向かった。

そんな様子を一人の少女が見ていた。

燦　・・・・やっと翠も決心できたらしいね。でもなんだろうね。すごく心が痛い・・・・・

それから2ヶ月ほどがたった。翠は馬家を継いだ。そして表面的には燦は文官として霞と蒲公英は武官として仕え、俺は翠の後ろ盾として翠を支えることになった。馬騰がなくなってからというものかなりの仕事に追われていた俺たちであったが最近やっと落ち着いてきた。

燦「あああ、疲れた」

燦は腕を上にあげた姿勢で言った。最近は大きな戦乱も無くわりと平和なときを過ごしていた。しかしそんな時間も一つの報告により一変する。

伝令「石上さま！報告です！」

今では緊急の場合は翠ではなく俺に報告がくるようになっている。

亮「なんだ！」

伝令「はっ！武威にて司馬仲達と名乗る者が反乱をおこしました！その数およそ３万！至急援軍求むとのもことです」

翠「そうか！ならはやく出陣しないと！」

亮「待て！」

出陣の準備にかかろうとする翠を引き止めるように言った。

亮「伝令、もう少し詳しい報告があるだろう。それをしてくれ。あと・・・・もう一度その反乱を起こした奴の名を教えてくれ」

伝令「はっ！そのものはなにやら怪しげな妖術をつかい、武威の我が軍を悩ませているもようです。その者の名は司馬仲達です！」

やはりあの司馬仲達か。確か知に優れていて正史では諸葛亮の北伐を何度も食い止めている将だったな。

それにしても・・・・・妖術ってなんだ？

その疑問については霞がかわりに聞いてくれた。

霞「その妖術っちゅうんはどんなもんなんや？」

伝令「申し訳ございません。そのあたりに関しては・・・・・・・・・」

どうやらそこまではわかっていないらしい。

行ってみないとわからないか・・・・・・・

亮「翠、待たせたな。すぐに出陣の準備にとりかかろう」

翠「わかった」

亮「翠と蒲公英は兵を霞は兵糧とかの準備をしてくれ」

そして各々自分の持ち場へといった。

玉座の前には俺と燦だけが残っていた。

亮「燦。一応このまえ頼んでつくっておいたものを持っていっておいてくれ」

燦「亮、あんなもの本当に役にたつの？」

亮「念のためだ。念のため」

そういい終わると燦もいなくなった。

出陣準備が整った俺たちは今、武威にむけ進軍していた。その数は

およそ１万５０００だ。武威へは一本のきちんと整備された道があるので比較的行軍は楽かと思っていた。

亮「森か・・・・・・」

俺の目の前には馬が３頭ほど並んで通れる道のまわりに木が生い茂っている森があった。この場所は地図にはのっていなかった。

亮「道を間違えたか？・・・」

燦「いやそんなことはないよ。でも・・・・・蒲公英。ここ以外に道はある？」

蒲公英「あるにはあるけど１日遅くなっちゃうよ」

霞「そんなゆうちょうにしとる場合とちゃうんやないか？」

亮「霞の言うとおりだ。このまま進軍するぞ」

伏兵の可能性は十分にあったがそのへんは先鋒である翠にもよく言ったし俺たちの軍の錬度ならすぐにたいせいを整えるのは容易だと考えたので大丈夫だと思った。

反乱軍兵士「仲達さま。奴らこのままこの森を通過するらしいです」

仲達「そりゃ彼らは迅速な行軍をしなくてはいけないからね。この森を通過するのは既定事項さ」

仲達は微笑みながら兵士にそう言ってこう続けた。

仲達「じゃあ行こうか」

反乱軍兵士「はっ！」

燦「亮、伏兵はどうやら大丈夫みたいだよ」

亮「ああ」

俺たちはもう少しでこの森を抜けようとしていた。

亮「俺の考えすぎだったか・・・・・・」

すると突然・・・・

馬超軍兵士「わあああああああああああ」

その先鋒の部隊の声は中軍である俺まで聞こえてきた。
そして俺は声を張り上げた。

亮「おい！どうした！」

伝令「はっ！先鋒より伝令！なにやら怪しげなものを森から伏兵が投げてき、それがもの凄い音をたて破裂し損害が増え、大混乱となっております」

たしかにさっきから遠くで音が聞こえてくる。
そしてすぐに俺たちのところにもその怪しげなものが飛んできた。
それはもの凄い音をたていくつも飛んでくるので鼓膜が破れそうだった。

燦「なんだこれ？！」

燦は絶叫していた。
そして次々と破裂し負傷するものが多く出てきた。

亮「これは！」

この破裂するものを俺は知っていた。これは今から何百年もさきである元寇で元軍が使っていた「てつはう」という兵器だ。しかしこの時代ではてつはうはおろかてつはうをつくる際に欠かせない火薬

すら存在しないのだ。

そうこう考えている間にも損害はどんどん増えていた。

亮「このままではまずい！全軍！撤退！撤退いいいいいい」

その号令とともに俺たちの軍は撤退を開始した。

俺は先鋒である翠だけが気がかりでならなかった。

そして俺たちの命がけの退却戦が始まった・・・・・・・

第１０話　決心してくれました（後書き）

やっぱ休日だとけっこう書けますね・・・・

第１１話　とにもかくにも逃げました（前書き）

１１話です。

前回の話あたりから思った方もいると思いますが作者のご都合パワーが全開となっております。三国志や恋姫の原作どおりにしてほしいという人にとっては不快に思うかもしれません。ですのでそういうのが嫌な方はこの先は見ないことをオススメします。それでもいいという方はこれからも読んでいただけるとありがたいです。

第１１話　とにもかくにも逃げました

亮「はあはあ・・・・・・くそっ」

俺は完全に息があがっていた。しかしそれは軍の兵士全員に言えたことであろう。

燦「みんながんばれ！この森から出れれば大丈夫だよ！」

燦も必死に鼓舞していたがなかなか士気は戻らなかった。それも当然のはず、この時代にあるはずも無い火薬というものはこの時代の人にとって恐怖でしかなかった。

それにしても・・・・・司馬仲達・・・・・・・・・・・・・。いったい何者なんだ？たしか三国志演義で諸葛亮が南方の藤甲兵に苦戦していた時火薬を作ったっていう記述があったな。でもあれは三国志演義での話だしましてやそこから兵器をつくるなんてありえない話だ。さらにこの場合は諸葛亮じゃなく司馬仲達だ。

それに・・・・・この絶妙なタイミングで使ってくるその指揮能力。並の将が出来るようなことではない。

亮「くそっ」

・・・・・・・・・・・・・俺の判断が甘かったせいでこうしている間にもどんどん人が倒れていく。それがとても辛かった。

すると前から霞が来て俺に言った。

霞「亮！ここはうちがくいとめたる。そのうちに退却してはよ軍をたてなおせい！」

霞は自ら殿をつとめようとしていた。

亮「すまない霞。でも引き際は見誤るなよ」

俺はその言葉だけをつげて馬で駆けていった。

霞は自らの隊に叫んだ。

霞「っしゃああ。張遼隊！みなを引かせるために奮闘せんかい！」

張遼隊「うおおおおおおお」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

反乱軍兵士「仲達さま。依然として我らの優勢に変わりはありませんが相手の騎馬隊によりこちらの追撃が行えません！」

仲達「その騎馬隊の旗の名をおしえてくれるかな？」

仲達は微笑み、優しくその兵士に聞いた。

反乱軍兵士「はっ！その隊の旗は「張」とのことです」

仲達　・・・・・「張」ということはおそらく張遼だな。まったく、自らの臣下にこんな絶望的な状況で殿をまかせるなんて天の御使いとやらはそうとうな悪党らしいね・・・・・

そもそもこの反乱軍は馬騰の家督を継いだ馬超がこの地に舞い降りた天の御使いによる様々な根回しにより権力を奪われ、そのまま天の御使いが権力を思いのままにしているという根も葉もない噂がまことしやかに語られ、それが発展して出来た組織である。

それだけこの馬騰の国がよく統治されていて民からの信頼も厚かったことがうかがえる。それで馬騰が死んだ今、その思いは馬超へと

受け継がれ、このような事態にいたっているのである。

仲達「わかった、ありがとう。じゃあ僕がそっちに行って指揮するからここは君に任せるよ・・・・・・ああ、あと火薬はもう使わないよう伝達しておいて。もう決着はついてるし、それに火薬は重要だから出来るかぎり節約しておかないとね」

反乱軍兵士「はっ！わかりました！ご武運を祈ります」

そう言って兵士はかけていった。

仲達「じゃあ僕も行くかな」

仲達は重い足取りで歩いていった・・・・・・

・・・・・・

霞「よっしゃ踏ん張れよ張遼隊！」

数こそ減ってはいたが張遼隊の活躍はめざましかった。てつはうが投げられてこなくなったとき霞はここぞとばかりに反乱軍を押し返していた。それがきいたのか反乱軍の攻撃にいまひとつ手応えがなくなった。

すると相手の軍から歓喜の声があがってきた。

反乱軍兵士「仲達さま！仲達さまがこられたぞ！」

霞　・・・・・仲達？ああそういや反乱軍の主犯格がそんな名やったな・・・・・

そう思った霞はおもいっきり叫んだ。

霞「そら！相手さんの首領がおでましや！突撃するで！」

霞はそう言い放つとそのまま敵軍のなかに突っ込んでいった。

反乱軍兵士「うわあああああ」

そんな声が戦場を駆け巡った。

霞　・・・・・これでちっとはおとなしなるやろ・・・・・

そう思っていた霞であったがむしろ逆であった。

反乱軍兵士「なんとしても食い止めろ！仲達さまに指一本たりとも触れさせるな！」

霞「くっ」

霞　・・・・・なんなんやこいつら。仲達っちゅうんはそんなに凄いやつなんかいな？・・・・・

そんな味方軍の声を聞いた仲達は叫んだ。

仲達「全軍！左右に散れ！」

この策はこの人たちにはきくだろうな、まず混乱は必須だ。仲達はそう思った。

さっきの仲達の言葉で反乱軍兵士はすぐさま森へと姿を隠した。この動きの迅速さで仲達への忠誠心がわかった。

しかしそんなことより霞は別のことに驚いていた。

霞　・・・・・この策、亮が虎牢関攻めのときにうちにやった策とそっくりや・・・・・

そう思った霞は一つの策にうってでた。

霞「うちらも全軍散れ！」

仲達「！！」

仲達にとってこれは予想外の対応だった。

霞「よし！弓隊！火矢をはなつんや！」

この日はとても乾燥していたので火はとても効果的だった。森はすぐに燃えていった。

そこからいぶりだした反乱軍兵士を霞は迎撃し殲滅していった。

仲達「・・・・・さすがにこのままではまずいな・・・・・全軍！引けええ」

少しして反乱軍は引いていった。

撤退の途中、仲達は思った。

仲達　・・・・・それにしても、僕がするなら別に抵抗が無い策だったけど張遼にとっては集団を散らせるんだから抵抗があったはずだ。よくあんな思い切ったことができたなあ・・・・・

仲達はせっかくの追撃のチャンスを失敗したというのにあまり落ち込んではいなかった。

仲達　・・・・・次の策を考えないとね・・・・・

～森から5里離れた荒野～

亮「霞はまだなのか！」

俺は珍しくいらついていた。あのとき霞に殿なんてまかせなきゃよかったといまさら思っている。
そんな最悪の状況も考えていた俺に燦が叫んだ。

燦「霞だ！」

燦が叫び指差した場所には張遼隊と手をふっている霞の姿があった。

霞「ただいまかえったでえ」

帰ってきた霞を俺はすぐさま抱きしめた。

燦・翠・蒲公英「！！！」

霞「ははは。うち、男に抱かれたことなんてないけんわからんかったけどけっこうこっ恥ずかしいもんやのな・・・・・」

亮「心配させんなよ・・・・・」

霞「すまんかったな亮・・・・」

そう霞が言うと俺は霞から手を離した。
そして重要なことを聞いた。

亮「それで霞、追撃部隊は？」

霞「ああようわからんけど撤退していったで」

亮「そうか・・・・」

俺は安堵のため息をついた。

霞「それより亮・・・・・・みょうなことがあったんや」

霞は突然俺になにかをききたげな顔をして言った。

亮「なんだ？」

霞「前、虎牢関でうちと亮が戦ったとき亮、あんたみょうな戦い方してたやろ」

亮「ああ」

霞「あれを司馬仲達はしてきたんや」

・・・・・・・・・・・・・・・あれをこの時代でするやつがいるのか？俺から言わしてみればこの時代の人間であんな戦い方をするのはよっぽどの馬鹿だな。しかし今回の敵は馬鹿などではない。司馬仲達、ますますその顔がみたくなってきた。

亮「まあ、侮っていたら痛い目にあうな」

燦「そうだね」

燦はニッコリ笑って言った。

翠「じゃあ今日はここで野営するか」

蒲公英「さんせー」

そうだな、今日はひとまず休憩としよう。

しかし明日は・・・・・・・・・・・・

俺は地面を向いて言った。

亮「今度こそは負けない・・・・・」

空から落ちる流れ星とともに俺の言葉は地面へと沈んでいった・・・・・・

第１１話　とにもかくにも逃げました（後書き）

１１話終了です。

次の話が終わったぐらいで一度キャラ紹介をしておきたいと思います。

第１２話　驚愕しました（前書き）

１２話。

はあ。高校受験の勉強もしないといけないためとても忙しいです。

第１２話　驚愕しました

俺たちは今、野営をした場所を後にして武威に向け進軍していた。
しかしおそらく武威に着く前に司馬仲達はなにかしらの策をうってくるだろう。

燦「あいつまた奇襲してくるかな」

亮「さあな」

するとしばらくしてから思いもよらぬ事態に俺たちはいた。

翠「なにがしたいんだ、司馬仲達は・・・・・」

そう、行軍している最中に前方に砂煙が見えたと思うとそこには軍がいた。しかもそれは司馬仲達の軍だったのだ。

その軍を見ていると司馬仲達はなにかを叫んだ。

仲達「私の名は司馬仲達、天の御使い、拝聴したいことがある！前に出られよ！」

このお互いの軍が対峙している場面で仲達は言った。そんなに大きな声ではなかったがよくとおった声であった。

燦「亮、危険だよ。こんな挑発に乗らないほうがいい」

翠「そうだぞ亮。お前の体は大事なんだからな」

霞「うちもそう思うで」

3人は口々に俺に言った。

蒲公英「じゃあ蒲公英が行くー」

燦・翠・霞「もっとだめだ！」

まあ蒲公英は別の意味で心配だしなにしでかすかわからないからハラハラすんだよな。

・・・・・・・

亮「みんな聞いてくれ」

・・・・・・・・・・・・・・

４人は黙ってこっちを向いた。

亮「おそらくこの反乱の原因は俺だ。俺には責任がある。だから行かしてくれないか？」

この反乱、俺には一つの仮説がたっていた。よく統治されていた馬騰の領土で馬騰が死んだからといって反乱は考えにくい。だったら原因はなんだろう？翠に原因が？違うな、その原因はこの世界にとってイレギュラーな存在である俺に間違いない。

燦「まあ亮がそこまで考えてるんだったらいいんじゃない？」

その燦の言葉にみんなは同意してくれた。

そして俺はお互いの軍の中央へと馬で駆けていった・・・・・・・

司馬仲達は仮面をつけていた。そのせいで顔がわからなかった。

司馬仲達「武器を持たずにくるとは感心だね御使いさん。まあ懐に隠し持っている可能性はいなめないけどね」

俺たちは１０ｍくらいはなれた距離で会話をした。
俺は殺気をだしまくっていたのだがそんな俺を前にして司馬仲達は平然とそう言った。

亮「司馬仲達、お前をここで殺す気はない。それで聞きたい事とはなんだ？」

俺は殺気を封じ言った。

仲達「そうだね、じゃあ本題を言おう。これ以上馬超さまを苦しめるのはやめてもらえるかな？」

やはり俺が原因であったか・・・・・・まあそっちのほうがやりやすいからいいけど・・・・・・

亮「残念ながら翠を苦しめた覚えなどない、それはよくある噂だ。司馬仲達」

これで誤解が解けるといいんだがな・・・・・

仲達「そんな戯言に付き合っている暇はないんだ。・・・・・・・これじゃらちがあかないね。後は戦で決着をつけようか」

そういい終わると俺の返事も聞かず、自らの陣営に戻っていった。

やはり誤解は解けなかったか・・・・・・

それにしても・・・・・・・・・・・

なぜか知らんが懐かしい声だったな・・・・・・・

反乱軍兵士「おおおおおおおおおおおおお」

馬超軍兵士「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

そんな声とともに戦いは始まった。剣のつばぜりあう音が戦場を駆けていた。

司馬仲達はなにも仕掛けてこない・・・・・か・・・・。

・・・・・・ここは昨日と違って森ではなく荒野のため火計や伏兵は警戒しなくていい。

こちらから仕掛けるか・・・・・・

亮「先鋒！後退せよ！」

そう叫ぶと先鋒である霞は後退を始めた。

反乱軍兵士「仲達さま、敵の先鋒が後退を始めました。今が突撃の好機かと・・・・」

仲達「あれはあの御使いの策だ。おそらくその誘いにのって突出してきた僕たちを左翼と右翼でたたく気だろうね。君はそのまま突撃はかけず、左翼と右翼を徹底的に攻撃するよう伝達してくれないか？」

反乱軍兵士「はっ！わかりました」

仲達　・・・・・今度はこっちの番だよ・・・・・

亮「・・・・・・読まれたか・・・」

さすがにあの司馬仲達なだけはあるな・・・・・

馬超軍兵士「石神さま！敵の陣形に変更がありました」

そう報告された俺は敵に目を向ける。

・・・・・！

亮「おい！左翼の蒲公英はどうした？！」

俺は嫌な予感がした。

馬超軍兵士「はっ！馬岱さまは陣形に隙ができたと言いそのまま突撃をかけました」

くそっ。遅かったか・・・・。俺の予想が正しければあれはおとりの隙だ、司馬仲達も仕掛けてきたということか・・・・・。

俺は伝令に言った。

亮「伝令！急いで蒲公英を呼び戻せ！」

伝令「はっ！」

そう言い伝令は戦場を走っていった。

亮「燦！」

俺は叫んだ。

燦「うるさいなあ。隣にいるよ・・・何？」

亮「すぐにあれを持たした部隊を用意してくれ！俺はその部隊を率いて蒲公英を救援にいく」

こうでもしておかないと蒲公英がどうなるかわからない。

燦「わかった。すぐに用意するよ・・・・じゃああとの指揮は私ってことでいい？」

俺はすぐに返事をした。

亮「ああ、かまわない」

仲達「まんまとかかってくれたね」

仲達は笑みを浮かべていた。

仲達「伝令」

伝令「はっ！」

仲達「深入りしてきた相手の左翼をそのまま突出させ、ころあいを見てそのまま右翼で退路を塞ぐよう伝達してくれないか？」

伝令「かしこまりました！」

このときの戦場はかなり入り乱れていたが司馬仲達、亮、この二人

にとっては思い通りに進んでいた。
このときまでは・・・・・・

蒲公英「おりゃおりゃ～」

蒲公英は亮たちが考えていることなど考えもせず一心不乱に戦っていた。

伝令「馬岱さま、石神さまより報告です！」

蒲公英「なにー？」

敵と戦いながら蒲公英は伝令の言葉に耳をかたむけた。

伝令「すぐに部隊をひかせろ、とのことです」

蒲公英　・・・・・う～ん、お兄ちゃんが言うことだからよっぽどの理由があるんだろうなあ・・・・・

そう思った蒲公英はすぐさま部隊をひかせようとした。
だが仲達の策はすでに実行されておりそれは叶わぬ命令となった。

反乱軍兵士「左翼をこのまま殲滅しろ！だが馬岱さまだけは傷つけずに捕らえるんだ！」

反乱軍兵士　・・・・やっぱ仲達さまはすげえ、こんなことが平然とできるんだから・・・・・

そんなことを思う兵士も多々いたがそんなとき退路を塞いでいるはずの兵士から悲鳴が聞こえてきた。

反乱軍兵士「わああああああああああああああああああ」

その声は仲達にももちろん聞こえていた。

仲達「どうしたんだい？」

仲達はさほど驚いた様子もなく逃げてくる兵士に聞いた。

逃走兵「そっそれが仲達さま、矢っ矢が・・・、まっすぐとんでくるんです」

仲達「なに？！」

そもそも弓というのは放物線をえがいてとんでくる。そうしないと飛距離がでないからだ。

仲達「僕がすぐにいくよ」

仲達は逃走兵の案内をえてそこまで向かった・・・・・・・

仲達「あれは・・・・・・・・」

仲達は驚愕し目の前の光景を信じられなかった。

亮「うてええええ!うてええええ!・・・・・」

俺はそう叫んでいた。

そう叫んだ理由として俺は今率いている部隊にボウガンを持たせているからだ。
しかしボウガンといっても平成の世にあるようなものではなく木製でつくらせたものだ。
構造はすべて俺が教えた。昔、仕事柄そういう危険物を扱っていた知り合いがいたのでよく構造とか色々なことについてきかされたものだ。性能自体はたいしてよくなかったが連射を可能とし、しかも

まっすぐとぶのでその威力は絶大だった。

蒲公英・・・・・・・無事であってくれ。

仲達はおもわず声をもらした。

仲達「ボウガンだと・・・・・・・」

仲達　・・・・この時代の者がそんなものをつくるなんて、天の御使い、いったいなにものなんだろうね・・・・・

反乱軍兵士「仲達さま・・・・・・・・」

仲達「ああ、そうだね。あんな秘密兵器を隠されてたんじゃやってられないよ。引こうか？・・・・・」

そう言った矢先だった。

伝令「報告です！」

仲達「どうしたの？」

仲達はおもむろに聞いた。

伝令「部隊の一部で寝返りが複数発生しました」

そう聞いた仲達はその場に立ち尽くして言った。

仲達「・・・・・終わったな・・・・・・・・・・・・」

燦「いくら忠誠心が高いといっても3万もいれば寝返る人たちがいてもおかしくないだろうね」

この寝返りを手引きしていたのは亮に軍をまかされていた燦であった。

燦「ふっふっふ・・・・・だよ」

このときの燦は黒かった・・・・・

同時多発的に起こった寝返りがきめてとなり反乱軍は混乱をおさめられないまま敗北した。

・・・

その本人である司馬仲達は下を向いていた。どうやら仮面ははずしているようだ。

亮「司馬仲達、顔をあげろ」

俺はそいつがどんなやつかとてもきになっていた。

仲達は顔をあげた。

亮「！！！！！！！」

仲達「！！！！！！！」

俺たちは驚愕した・・・・・・・

第１２話　驚愕しました（後書き）

すいませんがキャラ紹介は都合上つぎの話が終わったあとにします。

第１３話　あいつと再会しました（前書き）

１３話です。

ぼちぼちいきましょう。

第13話　あいつと再会しました

・・・

亮「みんな、すまないが席をはずしてくれ」
俺はこれから話すことはみんなに聞かせてはならないと思い、そう言った。
翠「そんなのだめに決まってるだろ！こいつは今回の敵だったんだぞ」
まあ事情がわからないみんなにとってはこれが普通の反応だろう。
だが、燦は違った。
燦「翠、ここは亮の言うとおりにしようよ。ただ・・・・・念のためにわたしをここにいさせよ」
翠「燦がいるなら・・・・・・」

俺はしばらく考えた。
ここからの話は正直誰にも聞かせてはならないことだ。直感が俺にそう言い聞かせた。
でも燦なら・・・・・
亮「わかった。護衛として燦を残そう」
燦「了解だよ」
翠「燦、たのんだぞ」

そういい終わると俺たち3人を除きこの場所には人がいなくなった。

最初に口を開いたのは俺だった。

亮「燦、そいつの縄をほどいてやれ」

燦「！！」

燦　・・・・・まったくいつだって君はわたしを驚かせるね・・・・・

燦「わかったよ」

素直に燦は俺の言うことを聞いてくれた。
もう少し抵抗されると思ったんだがな。

燦はすぐに縄をほどきその場に縄を置いた。

仲達「ありがとう」

雪村は燦にニコッと笑い御礼を言った。

燦「・・・・・・・」

無言を燦は保った。まあ警戒はするだろうな。むしろ警戒しない方がおかしいだろう。

我慢していたことを溢れさせるように小さく、しかし力強く雪村は言った。

仲達「なつかしいな亮・・・・・」

そう雪村が言った瞬間だった。

シュッ！

燦の腰にさしてあった剣が雪村の首めがけて抜かれた。

ギンッ！

燦の剣が雪村の喉をとらえる前に俺が燦の剣をとめた。

燦「亮！こいつは今君の真名をきやすく呼んだんだよ！それなのになんでとめるんだよ！」

はあ・・・・・・これじゃ話が進まないな。燦には最初から話すしかないか・・・・・・

亮「燦、今から俺とこいつは話をする。それを静かに聞いておいてくれ。剣を抜くなんて御法度だぞ」

燦は黙ってくれたが無言の威圧を雪村にかけていた。

まあ・・・・いいか。

亮「お前はいつからいる？雪村」

最初の疑問として浮かんだのはこれだった。

仲達「そうだねえ。もう7年はたってるかな」

7年か・・・・長いな・・・・・。どおりで俺が最後に見たときより老けて見えるはずだ。

仲達「そういう亮はどうなんだい？」

亮「そーだなあ。俺は1年くらいだな」

雪村は「ふーん」と言い黙り込んだ。

しばらく沈黙を保っていたがそんな俺たちより沈黙を保っていた燦が質問をしてきた。

燦「ひとつ聞いてもいい？」

俺は頷いた。

燦「さっきからいつから来たとか言ったりお互いを亮とか雪村とか呼び合ったりして二人はどういう関係なの？」

俺は本当のことを言うべきか迷っていた・・・・・・

仲達「怪しい関係かな」

そんな俺をしりめに雪村がいきなり馬鹿なことを言いだした。

燦「えっ」

燦は顔を真っ赤にしもじもじしはじめた。なにを想像しているのやら・・・・・・

そんな燦を見て雪村は笑いを我慢していた。

・・・・・相変わらずこいつは人をいじるのが好きなようだ。

はあ・・・・・・こいつのこういうところは昔っからかわらないな。

まあこれでこそ俺の知ってる雪村なわけだが。

おっとこんなことを思っている場合ではない。

やはり燦だけには言うべきだろうか？言うべきではなかろうか？

・・・・・・

こちらを向いた燦の表情は真面目だった。
俺はそんな燦を見て決心が固まった。

亮「俺たち・・・・・つまり俺とこの雪村は未来から来たんだ」

どんな反応がくるかは俺の中では未知数だった。頭がおかしいやつと思われるかもしれない、そんな俺に失望するかもしれない。俺はそう思った。

しかし燦の返答はそのどれにもあてはまらなかった。

燦「へっ？なんだって？」

まさかの疑問形でかえされた。

亮「聞こえなかったか？未来だ、未来」

そんな小さい声で言った覚えはないんだけどな。とりあえずもう一度だけ俺は燦にそう告げた。

燦「・・・・・・・・・・未来って・・・・・・・なに？」

額に手をあて少し考える素振りを見せていた燦はまるでわかっていない様子だった。
するとそれまで俺と燦の対話を傍観していた雪村は燦に説明を加えた。

仲達「そうだねえ、未来っていうのはこの先にある世の中みたいな

ものかな」

よく考えてみればこの時代に未来という概念自体が存在しないのかもしれない。もしそうならば未来という言葉が理解できるはずもない。

だが理解のはやい燦だ。雪村の説明で大体は理解してくれた。

燦「う～ん。つまり明日の明日の明日の明日の明日・・・・・・・・・・・・っていうのが未来ってこと？」

またまわりくどい考え方だな。

まあ理解してくれたのはありがたいわけだが。

燦「えっ！つまり君たちは未来ってとこから来た正真正銘の天の御使いってことなの？」

亮「・・・・・・・・・・・・・・・・まあ・・・・・・・そうなるか」

これ以上言ってもだめそうだしそういうことにしておくか。

燦「すごいよ！」

目をキラキラさせながら燦は俺たちを憧れの眼差しでみていた。

なんかやりにくいな。

亮「だからこいつは同郷の者なんだ。決して怪しいものじゃないんだ」

燦「わかったよ」

すぐに燦は答えてくれた。ほんとうに燦の器の大きさはこういうとき助かる。

待っていたと言わんばかりに雪村は話にはいってきた。

仲達「じゃあ、改めて自己紹介をしておくかな。僕は司馬仲達、本名は大江雪村。亮はいつもどおり雪村でいいけどどうやら君も雪村を名乗っているようだからね。ややこしいからほかの人は大江でいいよ」

燦「じゃあわたしは大江さんにするよ。よろしくね大江さん」

まあうちとけてくれたかはわからないが燦も雪村への敵対心はなくなったようだ。

亮「自己紹介も済んだところでお前の兵をなんとか説得してくれないか雪村？」

俺たちは外に雪村の敗残兵を駐留さしている。その兵の俺への疑いをなんとかして晴らしてほしかった。そうでもしないといつまた反乱が起きるか知れたもんじゃない。

大江「僕の言うことならおそらくみんなも聞いてくれるよ」

そう言って雪村はその場から去っていった。その場には俺と燦の二人だけとなっていた。

亮「ありがとうな燦」

燦「亮の信用している人なら私にも信用できる人だよ」

やはり燦に話して正解だった・・・・・・・

第１３話　あいつと再会しました（後書き）

次でキャラ紹介をします。

キャラ紹介（前書き）

今回はキャラ紹介となります。

キャラ紹介

石神亮

本作品の主人公。かつては警視庁特殊部隊隊長を異例の若さで務めていた。消防署からの要請により火事のマンションでレスキュー活動をしているさいに同じくレスキュー活動をして瓦礫により身動きがとれなくなっている親友をたすけるときにタイムスリップした。年齢は２４歳。身長は１８１ｃｍ。タイムスリップ前よく着ていた黒い武装服を着ている。なお本人はこの世界で石神雪村と名乗っている。この雪村というのは彼の親友の名である。剣の達人でありかなりの武をもっている。さらにかつての部隊で作戦も担当していたため知にも優れている。仲間思いで常にきにかけている。正義心は強いがこの世界に来てからその考えがかわりつつある。

姜維

字は伯約。真名は燦。年齢は１８歳。身長は１５４ｃｍ。緑色の頭

巾をかぶり同じく緑色の古風な民族衣装のようなものを着ている。髪は金色。主人公がこの世界に来て始めて会った人物。知に優れ、武にも精通している。しかし一騎当千といわれるほどの武はもっていない。普段はのんきでなんでも受け入れる性格だが意外に鋭い部分もある。主人公のよき理解者。

大江雪村

この世界では司馬仲達と名乗っている。主人公の親友。前の世界では主人公より２つ年下だったが上記の出来事により主人公よりはやい時代にタイムスリップしたため現在の年齢は２９歳。身長は１７３ｃｍ。白い装束を着ている。常に冷静な態度をとっておりその性格は口調にもあらわれている。あまり身体能力は高くない。かつては作戦面で主人公を支えていた。真名として主人公には雪村と呼ばせるが他の者には大江とよばすことになる。この世界では主人公に会うまで商人をしていた。前回の反乱を手引きしたもの。しかし反乱そのものが間違いであったと主人公に会うことで気づいた。人をいじることがとても好き。

キャラ紹介（後書き）

これからもオリキャラはでるかもしれませんのでその場合はそのつど紹介をしていきたいとおもいます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5968y/

真・恋姫†無双～未来からの介入者～

2011年12月1日21時06分発行